

(2022年9月掲載)

「研究」再考(2) ～モデル研究を探す～

前回は「自分の研究を語る」ということを通して、自分にとって「研究」とは何かを自覚する方法について書きました。今回は「モデル研究を探す」ということで、他人の研究から自分が目指す理想の「研究」のあり方を自覚する方法について書きたいと思います。

ここでの「モデル研究」とは、「自分にとってモデルにしたい研究」という意味です。モデルには2種類あります。ひとつは、「こうありたい」と思うモデル、すなわち、「模範」や「接近対象」(Approach Model)と呼ばれるものです。もうひとつは、「こうはありたくない」と思うモデル、すなわち、「反面教師」や「回避対象」(Avoidance Model)と呼ばれるものです。

私の最初の研究テーマは理想自己(Ideal Selves)でしたが、自らの理想自己(なりたい／なりたくない自己像)について明確に語れない人には、直接的に問うのではなく、間接的に問う方法が有効でした。つまり、「こうなりたいと思う他人」や「こうはなりたくないと思う他人」のことを質問するのです。そうすると案外すんなりと、具体的に答えられるものです。

「理想自己」を「自分にとっての理想の研究」に、「こうなりたい／こうはなりたくないと思う他人」を「模範／反面教師としたい他人の研究」に、それぞれ置き換えて、改めて考えてみるとどうなるでしょうか。

あなたがモデル(模範／反面教師)にしたいと思う研究は、誰の・どのような研究ですか？

この問いは、あなたが理想とする研究のあり方を再考・自覚するためのものです。いくつか憧れた研究(者)を思い浮かべてみてください。そして、失望した研究(者)を思い浮かべてみてください。さらに、なぜ惹かれたのか、なぜ失望したのか、をそれぞれ分析してみてください。その答えこそ、あなたにとっての研究の価値・意義なのではないかと思います。

憧れた／失望した研究(者)をカードに書き出し、並べて、眺めていると、その中で同じ系統のものがあ、いくつかのグループにまとめられることに気がつくでしょう。KJ法の分析でも似たようなことをしています。(詳しく知りたい人は「KJ法」で検索してみてください)

今回は「モデル研究を探す」ということを通して、自分の中にある「良い／悪い」研究のイメージについて自覚していただくことを狙いとしています。そもそも「研究の良し悪し」とは何をもって決まるのか。改めて考えてみてください。そして「研究」再考は続く。

(大阪大学キャリアセンター 家島明彦)